

種子島出身の学生団体「のらねこ」（下江信之介代表）と種子島高校の生徒らの交流活動が3月、1週間にわたって展開され、同校でパッションフルーツの殻の繊維を原料にした和紙作り体験会が開かれました。前日に市民会館であった「スマートエコアイランド種子島」シンポジウムに参加した鹿児島大学の研究者や、東京大学の体験プログラムで来島中の学生たちも加わり、意見交換がなされました。

種子島高校生物生産科の生徒たちはパッションジュースを製造する際に大量の殻が出ることから、殻の繊維を取り出して和紙を作ることを考えました。この日、参加者は繊維を型枠に流し込む工程を体験した後、種子島の課題と今後の目標について語り合いました。

「のらねこ」は、2020年夏にあった「にしろのおもて未来ワークショップ」の成果を半年後の種子島シンポジウムで発表した当時の高校生が大学に進学した直後の21年5月に結成。現在のメンバーは関東、近畿、中国、九州の大学で学ぶ12人。下江代表によると、全国各地でのびのびと活動する様子をイメージして「のらねこ」と名づけたそうです。22年度はシンポ参加や島の中学、高校生との海岸清掃、歴史やグルメなど、おすすめスポットの地図づくりなどの活動を重ねており、佐藤南帆さん（鹿児島大学3年）が今回のシンポで紹介しました。

シンポに際しては、プラチナ構想ネットワークの小宮山宏会長が初来島しでの基調講演をはじめ、サトウキビのバガスや森林資源を使って脱炭素社会をめざす新光糖業や種子島森林組合の取り組み、EV（電気自動車）導入を取り入れた出光興産による活動報告がありました。とりわけ、島の将来を考えて行動する若者たちを頼もしく、心強く思います。



種子島高校生と「のらねこ」メンバーら